

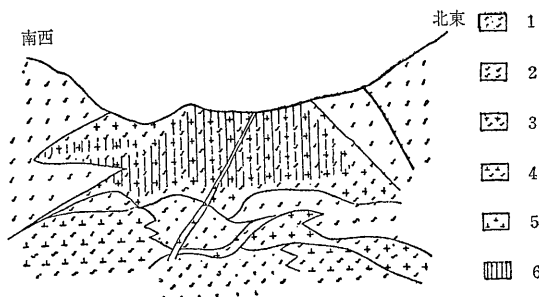
第3図 鉱床区域の横断面(王植 開広 1957)

- 1—緑泥石-石英片岩
- 2—絹雲母-石英岩
- 3—変質花崗閃緑斑岩
- 4—変質閃緑岩
- 5—閃緑岩
- 6—銅化帯

鉱床の特徴

中条山式斑岩銅鉱床の銅化帯は 基本的には 変成火山岩系の片理裂かに沿って貫入した変質花崗閃緑斑岩の岩床の分布と一致し この岩体にしたがって 40-50° 傾斜し 局部的には傾斜方向の下部で厚くなり 試錐の結果によれば 傾斜延長 1,000m 前後でもまだ縮小傾向はみられず 銅化帯の走向延長は傾斜延長よりも短かい、したがって この中条山斑岩銅鉱床の銅床形態は層状に近い。

銅鉱は主として細脈-銅染銅からなり その細脈の幅は 1-3mm の場合がもっとも多く 幅が広くなると含銅石英脈ないし含銅方解石脈となり 最大幅のものは 1m に達している。これらの細脈は母岩の割れ目を充



第4図 鉱床区域の縦断面(王植 開広 1957) 凡例は第3図と同じ

填しているが 主な細脈と銅染銅は母岩の片理に沿って分布する。この現象は 銅床が花崗閃緑斑岩の貫入後 熱水変質過程の進行にともなって生成したことを意味している。

銅石中の主な銅硫化物は黄銅銅 それに次ぐのが斑銅銅であり 輝銅銅と銅藍は比較的少量である。酸化帯中には各種の銅の酸化銅物がみられ その中では孔雀石がもっとも多い。随伴銅物として重要なものに 輝水鉛銅がある。なお 黄鉄銅は多量に産出する。

二次硫化物富化帯は ほとんど形成されていない。これが 中条山式とよばれる場合の斑岩銅鉱床の大きな特徴であり 不利な特徴である。

因に 王植らは この銅床を中深度・高-中温熱水銅床とし 生成期を吕梁運動の主褶曲作用期以後 横嶺関花崗岩活動の後期 したがって 先震旦期の地角斜帯発展末期としている(表参照)

地質調査所の出版物

・地質調査所月報 第30巻 第5号

坂本 亨・宇野沢 昭：茨城県中部 友部丘陵の第四系
TAKASHIMA, I.: Preliminary Study for the Alteration Age Determination by a Thermoluminescence Method.

磯部一洋：現成砂浜堆積物中にみられる変形ラミナについて
岸本文男訳：ソ連の先カンブリア系における変成源銅床の進化の特徴
(講演要旨)

・地質調査所月報 第30巻 第6号

UEMURA, F.: Tertiary Volcanic Activity, Geotectonic History and their Characteristics in the Northern District of Aomori Prefecture.

橋本尚幸・磯山 功・窪木時雨郎・奥海 靖・大沢 穠：岩木火山の北半部の地形学的考察 とくに赤倉沢泥流堆積物の泥流丘について
(新着資料の紹介)

・地質調査所月報 第30巻 第7号

磯部一洋：静岡県下田市多々戸海岸における海浜縦断形状の変化過程に関する研究

加藤碩一：1978年6月4日の島根県中部地震により墓石の被害について

加藤 完：地質調査所松江地区水位観測井の島根県中部地震(1978)前後における地下水位変化について

岸本文男訳：アジャリア構造单元と東ポントス構造单元の関係および地質発達型式に関する問題によせて

・空中磁気図(1:20万)

XXIV-1 2 北見地域空中磁気図

・5万分の1地質図幅 地域地質研究報告

津 幡(金沢-20)

・200万分の1地質編集図

18 日本活断層図(付 活断層について)

・地質文献目録 1956-1960(地域別)